

若松屋 落雁

菓子木型と引き菓子の歴史

犬山に伝わる儀式用の菓子木型は、古くは江戸時代のもが多く現存している町であります。犬山の成瀬城主は水利権を管理する要職にあり、御三家の大城下町で流行った和菓子文化を取り入れやすい裕福な城下町であった。犬山には多くの菓子木型がいまだ存在している。『犬山市誌』を調べてみると明治30年前後に菓子職が30人余り存在し申し組合を作っていたことが記されている。この数は大城下町と匹敵するほどの経済力を物語っていると考えられる。日本の菓子木型が使われ始めたのは明和時代(1764~72)といわれている。時代も文政時代(1804~30)に入り、彫刻の裏彫り技法が使われ、かわら版や錦絵の元版が活発に彫られるようになり、同様に落雁用の木型と生菓子用の木型である押し棒や筋板が考案された。菓子屋は和菓子製造の研究とともに精密精巧な木型を彫刻師の木型職人に彫らせ、多くの種類の木型を保有した。

『引菓子』は儀式を重んじる風習として江戸時代に創案された贈答品のお菓子である。城や神社、お寺の紋菓子、大きな目の落雁が城中の武士や裕福な町民の間で広まった。鯛は目出たい、鶴は千年、亀は万年、扇は末広がり、海老は腰が曲がるまで長生きしたいという武家社会の縁起を大切に考えたからである。山海の珍味を菓子にした引き菓子は山間平野の城下町で、海に近い城下町ではかまぼこ細工の引き出物である。

江戸末期になると職人もより一層に腕を競うようになり、『引物細工』といわれる生菓子が流行り出した。菓子木型は落雁(餅米を蒸した粉と砂糖に水分を与えて作る菓子)に使用し、練り物細工といわれる生菓子の形作りは一切菓子木型を使わず(文様用押し棒の絵柄だけの簡単な小さな木型だけで和菓子を作ることが職人の最高の誇りであった。手細工技法は菓子歴史を探っていくと、駄菓子のしんこ細工(米粉)、有平細工(飴)と同様に、練物細工(飴)が発達したと考えられる。木枠を使わずに職人の感性のまま、へら、はさみ、布巾で形を成型していく生菓子は時代を超え、現在の和菓子職人にまで受け継がれている。

鎖国が解けて明治時代となり、いろいろな産業も著しく発達を遂げる事となる。明治8年に北海道が開墾され、明治20年代になると小豆が本土から持ち込まれ栽培された。江戸時代までは小豆など豆類が各平野で作付けされていたが、北海道の開墾により、安価な菓子材料となる手亡豆や花豆も生産され鉄道貨車のお陰で万民に菓子が普及した事はいうまでもない。茶席や儀式菓子の煉切細工やいろいろ細工や多くの干菓子類もその時代に多くのものが創案された。その頃より干菓子の木型が主要都市の間で茶席菓子のために研究開発され、引き菓子の木型同様に多くの木型も増えていった。

犬山の引菓子文化は盛大で竹籠の中に慶事用には鯛鶴亀と海老、蛤、松、蓮根の七つ盛りや五つ盛りが作られ、また仏事用に蓮の葉と花と蓮根など五つ盛りや菓子を皿に盛る皿付けが作られるようになった。この時代の引き菓子は大衆向きが木型の落雁であり、高級用には練菓子として使われ、犬山周辺の近隣の郡町村より大勢のお客様が犬山へ足を運び注文菓子の全盛期であった。

第二次世界大戦後、引き菓子の形態が大きく変わっていった。その原因の第一は、日本の流通をつかさどる大都市の菓子木型が空襲で消滅した事により、落雁や生菓子の大型木型で作る引菓子が出来なくなり、『茶引き』といわれる小型生菓子に移行した事が上げられる。それに加え、住宅事情も重なり、結婚披露宴が個人の家で行われなくなった事が最大の要因である。大都市では『茶引き』といわれる羊羹と生菓子と餅菓子のセット菓子が主流の時代をむかえた。空襲に遭わなかった、犬山やその他の郡部の和菓子屋ではまだ『引菓子』である落雁や練り物菓子が全盛の時代であった。引き物には砂糖木型で

作った祝い砂糖が便宜性のために流行したが、長くは続くことはなかった。

昭和40年を境として引き物の木型菓子の時代がほぼ終末をむかえた事となる。犬山地方でも名鉄犬山ホテルが進出、観光旅館などが結婚式と披露宴を豪華に演出し、茶引き菓子や餅や赤飯なども総合一括注文の時代に入った。個人経営の『引菓子』を専門とする店は消滅していった。

さらに葬儀も総合の時代に入り葬式まんじゅうも同様の時代を迎えた。一時、引き物には砂糖木型で作った祝い砂糖が便宜性のために流行したが、木型菓子ほどの息の長い流行はなかった。

犬山は全国にまれに見る空襲に合わなかった貴重な城下町である。日本の菓子産業や文化は大都市で作られてきた。

今、日本人が母国を愛し、自国の歴史と文化を大切に考える時代を迎える時、和菓子の歴史を語る上において木型をはじめ菓子道具類は、貴重な日本の財産である。

犬山菓子型彫刻師 森鳳生

城下町で栄えた犬山には昭和四十年代まで下本町に森鳳生という菓子木型彫師が存在していた。この庵に、森氏の遺品である多くの作品が残されている。

